

2022年度 海外研究・臨床実習

番号	氏名	渡航先	国・地域	渡航先での受入期間
1	S・T	UAE大学	アラブ首長国連邦	2022/4/4-4/22
2	N・T	UAE大学	アラブ首長国連邦	2022/4/4-4/22

令和4年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6	年	学籍番号：*****	氏名：S・T
--------	---	---	------------	--------

渡航先国：UAE
受入機関名：UAE 大学 (Tawam hospital)
渡航先機関での受入期間： 令和 4 年 4 月 4 日 ~ 令和 4 年 4 月 22 日 (19 日間)

今回、大阪大学の岸本国際交流奨学金の支援を受け、UAE 大学 Tawam 病院での海外実習を行った。コロナウイルスの影響もあり、例年よりも短い3週間という期間であったが、色々と貴重な経験を積むことができたので関係者の方々に感謝を表し、今回の実習での経験を報告したい。

1. 本実習の目的

今回の実習での目的は大きく3つあった。異文化での医療の体験、医学的知識と医学英語の習得、希望診療科での病態と治療の実態である。まず1つ目であるが、そもそも海外実習の数ある選択肢から今回 UAE を選んだ理由はイスラム教を中心に日本とは全く異なる文化を有していることであった。そのような文化がどれほど医療に影響を及ぼすのかを知りたいというのが今回 UAE を選んだ理由である。また幸いなことに(?)、今回滞在した期間はラマダン(イスラム教徒の断食期間)の時期であり、生活面ではその影響も少なからず受け、良い経験ができたと思っている。さて、2つ目の理由については、やはり単純に実習を通して医学的知識を深めるとともに、日本では機会のほとんどない、英語での医療の体験というものを目的とした。日本では医学を日本語で習うが、他の多くの国では英語で習うので、英語が日常的に使われる海外での医療を経験できたことは貴重であった。3つ目の目的は、現在希望する神経内科、脳外科での UAE での医療を見学することであった。行っている治療の日本との違いはもちろん、食生活やライフスタイルなどの文化的背景からどのような疾患が多くみられるかなどにも興味を持って実習を行った。

2. スケジュールと実習内容

まずスケジュールを簡単な内容を以下に示す。

第1週目	4/4	4/5	4/6	4/7	4/8
放射線治療	オリエンテーション	オリエンテーション	カンファ 乳癌生検	機器の見学 外来見学	カンファ 回診 外来見学
第2週目	4/11	4/12	4/13	4/14	4/15
神経内科	カンファ 回診	カンファ 回診	カンファ 回診	カンファ 回診	カンファ 回診
第3週目	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22
脳外科	手術見学	回診 外来見学	手術見学	手術見学 回診 外来見学	回診 フィードバック

これより以下は週ごとに、印象に残ったものや勉強になったものを中心に詳しく記載する。

・第1週目

この週は放射線治療科での実習を行った。最初の2日は軽いオリエンテーションがあり、3日目の4月6日から実習が始まった。4月6日は乳癌を中心とした放射線治療のカンファレンスに出席後、乳癌の生検とそれをもとにした性状決定の現場を見学した。4月7日はCTやMRIの他、IMRTに使用される機器の見学とその仕組みの解説を受けた後、IMRTの治療計画をしている医師のところへ解説を受けたほか、外来見学、子宮頸がんに対する腔内照射の現場を見学した。4月8日は脳腫瘍を中心とした放射線治療のカンファレンスに出席して oncology center へ回診に行き、様々な症例を見た後、乳癌手術後に化学療法を行う患者の外来見学を行った。

・第2週目

第2週目は神経内科での実習を行った。この週は基本的にカンファレンスを行い、回診に行くという毎日であった。日本でもそうだが、患者は（変性疾患に比べて）圧倒的に脳卒中が多く、脳梗塞に対してt-PAを用いた症例や、しびれや脱力が一時的に見られたが後に改善したTIAの症例が多かった。ここで見た患者はほとんどが高血圧、高脂血症であり、ファストフードの多いUAEでは、食生活からくるこのような病態がしばしば脳卒中につながることを学んだ。カンファレンスでは専門的な医学英語が飛び交い、また患者も約半数はアラビア語で会話を行っており、理解できない部分が多かったが、実習で来ていたUAE大学の学生の方が翻訳、解説してくれるなど非常に感謝している。

・第3週目

第3週目は脳外科での実習を行った。この週は個人的に最も学びが多く、担当して下さった Mohammad Asha 先生は非常に丁寧に解説してくださり、とても充実した週であった。

初日の4月18日は膠芽腫 (glioblastoma) の手術を2件見学した。1件目は、2年前の手術後再発した症例で、膠芽腫の再発は非常に予後が悪いため本来は放射線治療などを行うところを、腫瘍の大きさや患者の状態から再手術を行うことになった非常に特殊な例であった。2件目は前頭葉の広範囲に膠芽腫が発生した症例で、腫瘍を全て摘出したいところを、患者の人格への影響から腫瘍を全て取り出すことはせず、術後に放射線療法を行うというものであった。2件とも腫瘍以外のことも総合的に考慮しなければならない特殊な症例であり、また膠芽腫を見るのが初めてであったこともあり、非常に勉強になった。

4月19日は回診で、水頭症の症例 (4月21日にV-P シャント) や銃弾による脳出血の症例 (4月21日に再び回診) を見た後、外来見学を行った。この日の外来での印象的な症例は脳性麻痺と髄膜腫の症例であった。脳性麻痺の症例では、Asha 先生が、脳性麻痺の原因3つ (外傷によるもの、発生の段階でのもの、変性疾患) について解説してくださりとても勉強になった。髄膜腫の方は、grade2 (再発可能性あり) の症例で、術後にどのようなプランで放射線療法を行っていくかについて、その副作用も含めて色々と教えてくださった。また最後に翌日4月20日に行う下垂体腺腫の症例をカルテで確認した。

4月20日は上記の下垂体腺腫の手術を見学した。基本的には Hardy 手術を行う方針であったが、かなり腫瘍が大きく、経蝶形骨洞では腫瘍全てを取り出すことができず、その周囲の頭蓋骨を破壊して腫瘍を取り出した。そのため髄液漏が懸念され、大腿の脂肪や腱膜を採取して詰めることを行い、手術を終えた。またこの日はちょうど宿泊していたホテルのビュッフェで UAE の医師の先生方が集まる会があり、誘っていただいて参加させていただいた。

4月21日は2日前の回診での水頭症の症例に対して V-P シャントを行った。V-P シャントを見るのは初めてであったが、金属棒を頭蓋から肋骨の壁側を通して腹腔まで到達させてシャントを作る様子が衝撃的であった (そんなことをして大丈夫なのか... という感じ)。その後は回診を行い、外来見学を行った。回診では以前見た銃弾の症例を再び観察することができた。この症例では第Ⅲ、Ⅶ、Ⅸ脳神経に障害が見られ、眼球運動や舌運動、カーテン兆候を見ることで神経診察をする様子が印象的であった。

最終日の4月22日は、午前はカンファレンスで前回外来で見た髄膜腫の症例の放射線療法の治療方針の議論に参加した。また、回診を行い、前日のシャントを作った症例の術後状態の確認などを行った。特にシャントの症例では患者が乳児のこともあり、母親が非常に心配されており、患者の病状を正確にしかし必要以上に心配させずに説明することの大切さも改めて感じた。午後はこの1週間を振りかえるフィードバックを Asha 先生と行い、給料や待遇、大変さよりも自分の興味と意志を大切に将来のことを決めるようにとのアドバイスをいただいて実習を終了した。

3. 成果

ここでは最初に記載した3つの目標それぞれについて感じたことを書きたい。

まず、1つ目の目標に関しては、医学的、医療的な面ではあまり日本との大きな相違はなかったと感じた。行っている治療や診断の仕方、医療器具などにもほとんど違いはなく UAE でも非常に医療が発達していると感じた。あえて言えば、女性医師の割合が多いこと、回診の際に男性医師が女性患者の部屋に入る際に毎回許可を取らなければならないこと、保険制度の関係で受診を断られる患者が一定数いることくらいだろうか。逆に日常生活の面では非常にイスラム教の影響を受けた。ラマダンの時期で昼食が食べられない日も多く、また早朝のお祈りで目が覚めたりという経験もした（私自身お祈りはしないが、イスラム教徒の1日5回のお祈りのうち1回は早朝で、その時間になると町中にコーランが放送で流れるのでそれで目が覚める）。また病院の先生方も院内でお祈りする姿を見かけたりもした。

2つ目の目標に関しては、特に医学知識の面では脳外科を中心に新たな症例なども見ることができとても勉強になった。特に膠芽腫や V-P シヤントの症例では実際の手術を通して治療の様子を肌で感じることができ、脳性麻痺などの症例では実際に新たな知識をインプットすることができた。また髄膜種の症例や第1週目の IVRT では治療方針を決定する難しさも感じた。医学英語の面では正直最後まで知らない単語もたくさん出てきて慣れない部分もあったが、以前よりは医学英語の知識が増えたのと、勉強する良いきっかけになったと思うので、これからもできるか限り継続して勉強したい。

3つ目の目標に関しては、上記の通りやはり神経内科、脳外科でも提供する医療に日本との大きな違いはなかった。文化が与える疫学的な影響に関しては、やはり食生活により高血圧、糖尿病、脳卒中の症例が多いこと、また道路が広くて車がスピードを出しやすいことから救急症例では交通事故が多いというのは多くの先生方が仰られていた。

その他にも、海外実習とは関係がないが、休日にはドバイやアブダビなども訪問し観光も行った。特に砂漠やドバイのブルジュハリファ、アブダビのグランドモスクは印象に残っている。

4. 今後の抱負

今回は医学的な面でも、生活や文化的な面でも本当に色々な経験をさせていただいた。特に実習を通して医学的知識の欠如に加え、世界では当たり前であるはずの医学英語の知識不足を痛感した。これからもより知識を蓄え、このような機会があればぜひまた利用したいと思った。また、文化的な面ではラマダンなど初めての経験も多かった。イスラム教という全く異なる文化を少しでも知ったことはこれからも色々な背景の国や人たちに会っていく中できっと役に立つと思う。

5. 謝辞

最後にこのような貴重な経験をさせていただいた全ての方々に感謝申し上げます。Tawam 病院で面倒を見てくださった放射線治療科の先生方、神経内科の Ali Hasan 先生、脳外科の Mohammad Asha 先生、日本でプログラムを提供していただいた教育センターの渡部先生、河盛先生、西川さん、そして奨学金を支援していただいた岸本忠三先生、本当にありがとうございました。

令和4年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科	6年	学籍番号：*****	氏名：N・T
--------	----	------------	--------

渡航先国：UAE
受入機関名：Tawam Hospital
渡航先機関での受入期間： 令和 4年 4月 4日 ~ 令和 4年 4月 22日（19日間）

【実習のスケジュール】

・実習診療科

4/4~4/22 整形外科

・1週間のスケジュール

8:30-9:30 カンファレンス

↓

月:回診

火:手術

水:外来

木:手術

金:外来

【実習目的】

今回の海外実習では異文化でどのように医療が行われているかを学びたいと考えていたため、最も日本と文化的に異なる UAE での実習を希望した。また、UAE は人口の 90%ほどが外国人労働者という特殊な国であり、患者、医療従事者ともに多様なバックグラウンドを持ち合わせており、そのような環境でのコミュニケーションや文化理解の方法を学ぶことは帰国後も大いに役に立つ経験となると感じた。

診療科選定に関しては私は整形外科を志望しているため、整形外科で 3 週間実習させていただいた。他の外科も実習させていただきたかったが、ちょうどラマダンの期間とかぶっていたため予定手術の数が制限されていたので、脳神経外科などでいくつかの手術を見学させていただくに留まった。

【実習内容】

日本の医療と違う点として、日本では多くの病院で主治医制が主となっているが、UAEでは基本的にチーム制が徹底されている。したがって、日毎に回診等の病棟担当、外来担当、手術担当が変わっていく。どのように担当を行うかは年次や国籍によっても変わっていく（UAE 国民であれば病棟業務をあまり行わなくて良かったりなどの違いがある）。私は朝のカンファレンスに参加した後、毎日一人の医師についてその日の担当の仕事に同行させていただくという形であった。

回診等の病棟業務では、患者も 9 割外国人でありアラビア語どころか英語も分からない人もいたり、逆に医師もアラビア語を話せない人も多くおり、コミュニケーションの取り方が日本と大きく違い、とても勉強になった。基本的に医師 1 人、看護師 1-2 人、レジデント 0-1 人という構成で病室を回っていたが、この時英語、アラビア語、ヒンディー語 or ウルドゥー語を話す人が基本的にいるような形になっていた。それぞれ必要に応じて翻訳を行いつつコミュニケーションをとっており、日本では見られない光景に驚いた。

外来では、その病院は基本的に Emirati(UAE 国民)向けであったため、訪れるのは現地人か裕福な外国人のみであった（入院は外傷などで入院した外国人も多くいた）。カルテ記入などは全て担当の看護師が行っていた。

外来を通じて、英語で医学を学ぶことのデメリットとして、患者への説明が特に難しくなってくるというのを感じた。

できるだけ模型や画像を使いながら丁寧に説明している印象を受けた。

手術では日本と大きな違いは感じなかった。術式や器具も日本と同一のものを使用していた。麻酔では吸入麻酔が日本より頻繁に使用されていると感じたが、これには医学的なことよりコストなどが関係しているらしい。手術では全て手洗いして術野に入らせていただき、丁寧に指導をして頂き、縫合などもさせてもらった。

【活動の成果及び感想】

UAE は日本と多くの点で全く異なる国である。政治形態としては 7 つの絶対君主制の首長国からなる連邦制をとっているが、実質アブダビが最も力を持っており、ついでドバイが力を持っている。したがって、アブダビの首長一家による独裁国家に近いわけであるが、豊富な石油資源を持つレンティア国家であり、これを国民に分配しているため、国民は特に何もしないでも高い生活水準を持っており首長は国民から非常に慕われていた。この状態で国を運営するために、100 万人の自国民に対し、900 万人ほどの外国人労働者を受け入れているため、非常に多様なバックグラウンドを持つ人が集まる国であった。宗教も国教としてイスラム教が定められているため、国の制度づくりもそれに沿った形で行われていた。しかし、現在は徐々に世俗化してきているようで、男女の垣根も小さくなり一緒に講義も受けるようになっていた（サウジアラビアからきたレジデントによるとこうした動きはサウジアラビアでさえあり、原理主義の一部の国を除きイスラム全体として世俗化しているようである）。

このように全く異なる文化でどのように医療が提供されているかを体験したことで、今後日本も移民をより多く受け入れていくと考えられるので、大いに役に立つと感じた。また、異なる宗教を深く体験できたことは非常に有意義なものであったと感じた。今までは宗教によって受けられる医療に制限ができることなどありえないと考えていたが、宗教は生きたいと思う気持ちと同じくらい根源の部分に存在するものだというように感じた。

【今後の抱負など】

今後日本で異文化を背景に持つ人は増えると予想されるので、そのような人に対し今回の経験を活かしたいと思う。留学の機会があればそこでも大いに役立ってくると感じた。

また、医療制度としても、チーム制の導入などは医師の労働環境向上のために有効だと感じたので、それを日本でも導入できるような環境づくりを目指したいと思った。

最後になりましたが、私共の UAE 海外実習へのご支援を賜り、岸本先生を初めとして お世話になりました方々に、この場を借りて御礼申し上げます。